

集結する歌

—家持と諸兄の歌の世界—

浅野 則子

はじめに

大伴家持には、多くの宴での歌が残されている。それらの歌を見ていくとき、宴の歌のテーマに季節をよみこむことと、集まった人々の歌に対する意識としての「風流」が同じものとして理解されることが多い。しかし、彼らの宴には「風流」を目的とした「歌人」が集まっているのだろうか。同じ場で同じテーマの歌を歌いあうということには、当然、同じ共通の理解があるはずであろう。歌という限られた表現方法で、その場が結びついているのはそこに実体とは異なつた世界があるといえよう。家持が越中から都へもどつた時、都の政治状況は複雑なものになりつつあつた。そこでは、だれと同じ場を持つかが重要なことであつたといつてもよいであろう。越中に戻つて以降の家持の歌の場をみていくことで、彼の求めた歌のあり方、歌の共通理解の背景を考えていきたい。

—

天平二十年（七四八）越中という「鄙」で都の政治から離れていた家持に、諸兄の使いである田辺福麻呂によって、元正と諸兄との密接ななかかわりを持つ歌が伝えられた。鄙で、都人である役人たちとの結

びつきを歌ではかっていた家持にとって、このような歌の世界は、都の空間の再生であり、大伴という家を意識することにもなつたであろう。すなわち、それは、藤原と対立する諸兄と言う政治の構図のなかでの彼の位置でもあつたのである。都に戻つて諸兄の文化圏にはいつた後の家持の歌は、諸兄との結びつきにより、まず、宴席にその場をもとめることとなるが家持が都にもどつて一番はじめに諸兄と席を同じくした宴は、万葉集によれば戻つた翌年である天平勝宝四年（七五二）に聖武を迎えての諸兄宅の肆宴であつた。

十一月の八日に左大臣橘朝臣が宅に在して肆宴したまふ歌四首
外のみに見ればありしを今日見ては年に忘れず思ほえむかも

右の一首は太上天皇の御製

むぐら延ふ賤しきやども大君のまさむと知らば玉敷かましを

右の一首は左大臣橘卿

松影の清き浜辺に玉敷かば君来まさむか清き浜辺に

右の一首は右大弁藤原八束朝臣

天地に足らはし照りて我が大君敷きませばかも楽しき小里

右の一首は少納言大伴宿祢家持 未奏

十九—四二六九—七二

諸兄宅での聖武を迎えての宴である。同席する八束は、母が諸兄の

妹牟漏女王であり、諸兄とは伯父、甥の関係である。ここでも家持は聖武をとりまく、諸兄の重要なメンバーといえよう。この宴は招かれた聖武が諸兄邸を誉め、それに対して、諸兄がわざわざ天皇の行幸があったことを「賤しいやど」と卑下することで挨拶とし、八束はこうした行幸がまたあることを歌い、結んでいく。ここに家持の歌はあるものの、それは「未奏」と書かれているように、その場では、披露されなかったという。しかしながら、別の日に家持が前の三首に歌を合わせたとしたら、それは、宴のすばらしさを保ちつつ、さらに土地をほめ称えることで、宴の広がりを出すものといえよう。こうして、家持は、諸兄のもとでその歌世界を共有し、望ましい宴の歌をつくりあげていく。天皇をとりまく諸兄の宴をみたが、さらに私的に諸兄が開いた宴をみていこう。

まずは家持の歌のみのこされているものとして、翌年の天平勝宝五年（七五三）の二月二十九日に諸兄邸での宴とされるものを取りあげたい。

二月の十九日に左大臣橘家の宴にして、攀じ折れる柳の条を見る
歌一首

青柳のほつ枝よち取りかづらくは君がやどにし千年寿くとそ

十九—四二八九 家持

これは、諸兄の長寿を祈り諸兄との関係を確認しつつ、諸兄の政治生命がつづくことを意味するものであり、この場にいた他の人物は定かではないが、諸兄のまわりで、彼の存在を頼りにしている者にも、こうした表現は受け入れられよう。伊藤博氏はこの歌の「君がやどにし」に注目される。伊藤氏は、宴の場をわざわざ指示するのは諸兄の家の庭に人々があつまっていることを強調したいためと述べさらにそ

れは諸兄の七十の賀を「世をあげて集い」であることを強調したかったためと論じた上で、それは、実体として、予期したほどの人が集まらなかったためにこう歌わざるをえなかったとされる。実体はどうであったかは明らかには出来ないが、確かなことは、家持がこうした、諸兄の祝賀の場で、はっきりと、諸兄の政治生命が続くことを歌っているということである。これは、その場にいる共通の背景を持つ人々にむかつて披露されたことは当然といえよう。ここには、家持の立場が明らかであるといえる。

こうした政治色の強いものとしては、翌天平勝宝六年の次の例があげられる。

二十五日、左大臣橘卿の、山田御母の宅に宴する歌一首

山吹の花の盛りにかくのごと君を見まくは千年にもがも

二十一—四三〇四

天平勝宝六年（七五四）の山田御母宅でのものである。山田比売鳥は孝謙天皇の乳母であったことから「御母」とよばれたものであるが、『続日本紀』によると天平宝字元年（七五七）八月に「人のもとる語を聴きて、丹誠を奉らず。同惡に相招かれて、故に蔽匿す。今、この事を聞きて、為に寒毛を豎つ。凶痛已に深し。理、追し責むべし。御母の名を除き、宿稱の姓を奪ひて」とされるように、その死後、奈良麻呂の政変の計画を隠していたとして孝謙から激しく糾弾されている人物である。こうしたことが後に明らかになるということは、やはり、この場は単に歌によって風雅をとらえるものではなく、共通の背景をもつ人々が集い、歌を媒介として共通の背景を持つ人々が集まる政治的な動きがあることがみてとれるが、この宴で家持は、「君」を讚美する歌を歌う。いうまでもなく、君はその宴にいる諸兄、その人であ

ろう。政治的関わりがはつきりしているメンバーのなかでのこうした表現は、宴での歌が互いの意志の確認であることをより明らかにするであろう。都に戻ってからというものの、家持の歌はほとんど宴の場でなされているといつてよいだろう。そのような歌のあり方は、時代の動き、すなわち政治をつねに背後に持っていたといえよう。さらに、家持が同じ文化圏をもち、信頼関係にあった諸兄と関わる宴を見たい。

十八日に、左大臣の兵部卿橘朝臣奈良麻呂朝臣が宅にして宴する
歌三首

なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にあるかも

右の一首は治部卿船王

我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きは増すとも

うるはしみ我が思ふ君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも

右の二首は、兵部少輔大伴朝臣家持追ひて作る

二十一 四四四九、五一

この宴は諸兄ではなく、息子、奈良麻呂の宅でのものであるが、奈良麻呂の歌は残されていない。しかしながら、諸兄、奈良麻呂親子は政治的には当然同じ方向を向き、歌の文化圏も同じものであったこととは、以前の歌のありかたからも明らかである。ここで奈良麻呂の歌は記載されていないものの、その場において、諸兄につながる奈良麻呂のもとで歌は歌われ、同席者は、同じ理解を求められていく。ここで船王は「なでしこ」を歌いだし、そのようにいつも側で見たい「君」と続く。この宴の主人、奈良麻呂をさすものであるが、こうした歌の世界において、その背後にいる諸兄に対する意識もあつたであろう。歌った船王は、かつて天平勝宝四年（七五二）家持が帰京

してすぐの、諸兄関係の宴として残されている奈良麻呂の但馬按察使の饞別の宴でも名を連ね、そのはじめに歌っていることから、諸兄、奈良麻呂との同じ歌の世界を共有していたとみてよいであろう。万葉集の記載によれば、当日の歌はこの一首のみであるが、家持は「追ひて作る」として二首を残している。それは、船王が主人になぞらえた「なでしこ」が長く咲き続けることへの願い、更にいつまでも見たいと結んで、相手を讃えているのである。こうした家持の歌のあり方について、なぜ宴席そのもので残さなかったかという疑問もあるものの、家持がこうして「追う」という形であつても、その宴を再生し、自らも関わつたとしたという点が重要なのではないだろうか。家持は「追う」という形で歌を残したことによって、その宴の時空を広げ、自らの歌をも同じ歌の空間へと入れたといえよう。それは、諸兄、奈良麻呂と同じ歌世界を持つ者としての信頼感によってなされることであつた。

家持の帰京後の諸兄関係の宴をみてきたが、その数はそう多いものではない。しかしながら、政治が動いていく中、どの場に身を置くか、そして、誰と、同じ背景を持つかということは見逃すことが出来ない問題である。大伴という家を背負う家持にとって、藤原氏に対抗する橘氏はよりどころであり、諸兄のもとで政治と関わっていくことは自らの立場を明らかにすることもあつた。

二

こうして、家持は、諸兄とそのまわりの人々の中で歌を媒介として、宴で結びついていくが、ここで考えておきたいのは、歌の場においての諸兄の意識であろう。彼は、自らを中心とする文化圏を築きつつ、聖武、さらには、元正との結びつきを歌の世界で明らかにしている。天皇との結びつきによる歌世界が彼の築いたものであるならば、その

世界は、表舞台としての政治との関わりが第一の目的であるというべきであるが、すでに越中で披露された歌でみられるように、諸兄の求めた歌の世界は、そこに、政治的に色濃い要素を含みつつも、その中には、直接に政治そのものとは関わりない人間関係をも包括している。元正のまわりにいた女性達がそれである。こうした人々も歌世界で当然、共通の認識をもっているはずであるが、政治の表面にでる男たちとは、また異なった場もあったといえよう。家持の歌を考へる上でこうした諸兄の歌世界の広がりには歌そのもののあの方としてとらえられていくのではないだろうか。諸兄のまわりの歌をみていきたい。

諸兄と宴で同席していた時のものではなく、諸兄が、宴でかつて交わした歌を宴で披露したものである。天平勝宝七年（七五五）の十一月二十八日に息子の奈良麻呂の宅に「集ひて宴する」という題詞のもと、諸兄はまず、次のように歌う。

高山の巖に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪

二十一 四四五四

高山の巖の根から歌いおこし、「ね」と言う言葉の続きから「ねもころ」に、積もった雪の見事さをうたったものであるが、この歌の後に、諸兄は、天平元年（七二九）という二十六年も前に交わした歌を歌うのである。

天平元年の班田の時に、使の葛城王、山背の国より薩妙観命婦等の所に贈る歌一首

あかねさす昼は田賜びてぬばたまの夜のいとまに摘める芹これ

薩妙観命婦が報へ贈る歌一首

ますらをと思へるものを大刀佩きて可爾波の田居に芹そ摘みける

二十一 四四五五・六

天平元年（七二九）、また葛城王であった諸兄は『続日本紀』によれば班田司を任命されるが、その班田の仕事の多忙さを訴え、それも相手への思いを表す行為は忘れていないことを伝えようとしている。これに対して薩妙観命は、彼の行為に感謝しつつも、「ますらを」がその姿のままで芹を摘む様子を諧謔的に歌い返すのである。男が自らの心の深さを訴え、それを女がかわすというのは、男女の贈答歌の表現の形式であり、こうした歌が成り立つのは、諸兄が相手の薩妙観命婦と、共通の理解のもとで歌を歌い得ていたということにほかならない。歌世界での深い結びつきは実体を超えた恋歌の世界として二人に共有されていたのである。

諸兄は、政治的な結びつきの一方でこうした世界ももっていたことになるが、それが、奈良麻呂宅での宴で披露されたというのは、その宴の場にいた人々がこの歌を歌われた時と同じ理解で受け止めたということになるはずである。宴の場には再生されたといえるであろう。彼らにとっての歌を媒介としたつながりとは実体の宴の場そのものを超えた時空に行くことすら可能なのであった。さらに見るならば、恋歌であろうとも、それは、個としてではなく、共通のもの、宴の同席者をむすびつける歌としてとらえられていることである。恋歌の表現のあり方もここでは、その実体以上に、共通の表現ものということが重要なものではなかったのだろうか。家持の周辺の宴に集う人々にとってこうした歌は、そう多くはないが、それすらも理解の範囲とするものもちあわせていたのが歌の文化圏であろう。

諸兄がかかわった恋歌的な世界を見ていく上でこの薩妙観命婦の歌は、意味を持つが、彼女が残した歌はさらに別の広がり結びついて

いく。それは、次の歌である。

四四三六

先太上天皇の御製、霍公鳥の歌一首

ほととぎすなほも鳴かなむ本つ人懸けつつもとな我を音し泣くも

薩妙観詔に応へて和へ奉る歌一首

ほととぎすここに近くを来鳴きてよ過ぎなむ後に験あらめやも

二十一 四四三七・八

この二首は、先の奈良麻呂宅での歌と同年の三月に披露されたものである。それは「三月三日に、防人を検校せしときに、勅使と兵部の使人等と、同じ集いて、飲宴して作る歌三首」という題詞を持つ歌と同じ時に披露されたとされる。これらの歌からみていこう。

朝な朝な上るひばりになりてしか都に行きてはや帰り来む

右の一首は勅使紫微大弼安倍沙弥麻呂朝臣

ひばり上る春へとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく

ふふめりし花の初めに来し我れや散りなむ後に都へ行かむ

右の二首は兵部少輔大伴宿祢家持

これらの歌は兵部省から難波へ派遣された役人が催した宴である。この三首は、いずれも都から離れていることを嘆くものであり、花の盛りを都で見ることのできないという思いはその場の人々の共通のものとなったであろう。こうした歌のあと、先の歌が披露されるのであるが、その前後の歌を記しておきたい。

昔年に相替りし防人が歌一首

闇の夜の行く先知らず行く我をいつ来まさむと問ひし子らはも

冬の日に鞆負の御井に幸す時に、内命婦石川朝臣、詔に応へて雪を賦する歌一首

松が枝の地につくまで降る雪を見ずてや妹が隠り居るらむ

四四三九

時に、水主内親王、寝膳安くあらずして、累日参りたまはず。よりにてこの日をもちて、太上天皇、侍孀等に勅して曰く、「水主内親王の遣らむがために、雪を賦し歌を作りて奉献れ」とのりたまふ。ここに、もろもろの命婦等、歌を作るに堪えずして、この石川命婦のみ独りこの歌を作りて奏す。

右の件の四首は、上総の国の大掾正六位上大原真人今城伝誦してしか言ふ。

初めの歌は、先に役人たちが歌った歌との関わりで防人そのものの歌を披露している。次ぎにこの薩妙観と元正との歌の贈答歌がある。ここでは、元正という太上天皇の存在そのものがかつての時代を表すものと思われ、元正をめぐる歌で時代を再生、共有しようというものであるといえよう。さらには、最後の歌は家持の祖父の妻のものであるので、家持を特別に意識したものと考えられる。こうして、難波で防人を送り出す役人たちの宴においてもその場と特に関わりのない人々の歌を出し、披露された歌によつて、その場にいる人々は、同じ世界へと向かうことができる。こうして、歌は表現においては広い世界を持ち得ていたと思われるが、ここで、元正その人の時代を出すために歌われたものが、女性達との贈答であったことに注目したい。御井のほとりで元正は雪を歌うことをまわりの女性に求め、また、体調を崩した水主内親王のために雪の歌を歌わせる。こうしてみると、そのまわりにいる命婦という女性達とともに、女性の歌の場を持ち、そ

ここでは、日常的に歌がかわされていたということになる。女性達のあいだでも歌を介しての結びつきがみてとれるのである。これは、宴において政治的なものを背後にもつ、男性の歌世界とはまた、異なったものであろう。

しかし、ここで明らかなのは、こうした女性の間で交わされた歌の作者である薩妙観という命婦が、諸兄ともまた、恋歌の世界をもっているということなのではないだろうか。歌の理解とは別にここでは、歌が交わされた実際の場が諸兄と元正のまわりの女官である薩妙観との間にあったということが重要であろう。それは、政治の中心にいて、役人たちと共に歌の共通の世界を持つ諸兄が、一方で、女性達との恋歌の世界をも、持っていたということになるからである。元正という女性が作った宮廷の女性の歌の場は、諸兄にも開かれていたのであった。こうした、恋歌の世界は、聖武が皇族の女性たちと、共有していたものではあるが、元正から聖武へと流れのみでなく、元正と政治的なつながりを持つ諸兄へも広がり、諸兄は、その世界を取り込むことでさらに元正との関係を深めていったものと思われる。かつて、越中にいた家持のもとへ諸兄の使いとしてやってきて、元正と諸兄の難波での親しい様子を伝えた福麻呂の歌の中にも、元正をとりまく女性の歌があったのは、諸兄その人がその世界に入り、他にはない歌のつながりを手にしていたことを伝えるということがあったといってもよいはずであろう。そのようなあり方は、一方で政治の世界を女性の歌へも浸透させていくということになり、先にみた、山田御母のようなありかたにもなるのではないだろうか。それはあやうさを持ちつつも、時代の中で歌のあり方の方向をしめしている。

諸兄にとつての歌の場とは、そこにいる人との共有の世界をもつこととであり、歌そのものの表現の差異よりも、歌を交わすことに重きがあったのではないだろうか。その結果、彼は、まわりに歌の世界をひろげていくことになる。諸兄を頼り、彼のもとで、歌いつづけた家持

にとつて、こうした世界は歌そのもののあり方として強く意識されていくのであった。

むすび

家持と諸兄との関わりを考える時、宴が大切なものとなってくるが、彼らにとつて宴とは、単に歌を交わす場であるのみではなく、時代の中で移りゆく政治的背景の中で歌でそのものによって、共通の背景を確認し、発展させていくものである。歌とは、心そのものの表出ではなく、共通の理解のもとで人々をまとめ、むすびつけるものであった。恋歌という形式においてもそれはまた同様であり、恋という表現の共有は、同じ理解のもとでなければできないものとなる。こうした、歌の文化圏は、従来考えられていたよりも、政治的な場で強く発揮されていき、歌は、そこに歌われるのが、たとえ都の自然であっても、その背後の世界なしでは、理解できない、いわば、共通認識のもとに成りたつ限られた世界となっていく。

家持は万葉集に様々な歌を残すが、彼の歌の背後にある政治的世界を基盤にしつつ、恋歌表現すらをもとりこんで、歌の場の共通の理解へと持つていく方法は、諸兄の歌の世界から学んだものが大きかったのではないだろうか。彼らを政治的に結びつける媒介となった「歌」が「万葉集」の中に残されたのである。

注

①天平勝宝三年（七五一）少納言となって帰京する。このとき、すでに元正太上天皇は三年前に崩じ、聖武は讓位して、孝謙の世となり、大伴氏をとりまく体制は変わりつつあった。

②このことは、別稿を準備している。「集約される心―家持の歌の場」

『別府大学紀要』四六号掲載予定。

③家持が越中の守として赴任している天平二十年（七四八）諸兄の使用である田辺福麻呂が訪れ難波宮での歌が披露されている。十七—四〇五六—六二

④藤原八束は、同年の十一月二十五日の新嘗祭の肆宴にも家持とともに名を連ねている。この時に歌った他のメンバーは大納言巨勢朝臣・式部卿石川年足・文室知努真人・藤原永手がいる。なお、永手は八束の同母の兄である。

⑤伊藤博氏は家持があえて別の日に作った歌を加えたのは、四首でひとまとまりのものをつくりあげようとするためであるとされる。『万葉集釈注』四二七二の注

⑥注⑤に同じ。四二八九の注

⑦この歌の「君」については多くの注釈書が主人の奈良麻呂とするが、『全釈』『私注』は諸兄とし、新日本古典文学大系では「主催者である左大臣を指すか、宴会場の主奈良麻呂を指すか明らかでない」とする。

⑧十九—四二七九の歌

⑨注③に同じ。

⑩上三句は同音で「ねもころを導く序詞であるが、「ねもころ」という言葉が心情を表す言葉以外に使われるのは、万葉集では、この歌を含めて二例しかない。これに対して『新日本古典文学大系 万葉集』では「降雪を瑞兆として吉事を期待」する歌であるために、使っているとする。また『万葉集釈注』ではこの部分とその前の「高山の巖に生ふる菅の根」という表現の珍しさから、上三句の序に「とくに深い永遠性・恒常性を見ながら、下一句におけるあまねき「雪」の瑞祥性や清浄性を浮き立たせよう」と意図したらしい」とする。

⑪『続日本紀』天平元年十一月七日に葛城王に任命する記事を見るこ
とができる。

⑫この歌が万葉集における諸兄の最後のものである。その点からも、歌のありかたが考えられるが、今は、その準備がない。

⑬歌の表現にある「本つ人」について、懐かしい人、昔なじみの人と解釈するのが一般ではあるが、『万葉集釈注』では具体的に母元明天皇をさすとし、更に『古典集成』では父の草壁皇子・弟文武を含むとする。

⑭石川郎女は大伴安麻呂の妻となり、大伴坂上郎女、稲公の母である。

⑮水主内親王は天智天皇の皇女であり、天平九年に薨じている。

⑯このあたりのことはすでに詳しく論じている。「共有される心」『別府大学紀要』四十四号